

第5章 まとめ

第1節 天明3年の浅間山噴火の降灰

天明3（1783）年の浅間山の噴火により鎌原村（現吾妻郡嬭恋村大字鎌原）では死者447名と伝えられている。火砕流・土石なだれが吾妻川・利根川を泥流となり流域に被害をもたらした。高崎市周辺も降灰があり、その様子が「文月浅間記」（旧『高崎市史』第1巻1969年に掲載されている）に克明に記されている。「文月浅間記」の筆者は、現在の高崎市田町の絹問屋であった羽鳥勘右衛門の妻一紅（1724～1795）である。「文月浅間記」によれば6月29日（7月28日）（以下（ ）内の日付は新暦を表す。）は霧のような細かい灰が降り、霜が降りたように積もった。7月2日（7月30日）は灰は薄雪のように積もった。この時点ではそれほど深刻な状態ではない。7月5日（8月2日）は昼過ぎに浅間山の山鳴りが起こり、噴煙を確認している。7月6日（8月3日）朝には降灰で雪が積もったように、庭や垣根の葉が埋もれて、花が咲いたようである。人々は、雪かきのように灰をかき集め、箱に入れたり、俵に詰めたりしている。午前11時頃浅間山の山鳴りが起こる。いつもより激しい山鳴りである。噴煙を確認している。夕方から一晩中軽石がさらさらと音を立てて大量に降り積もる。稲妻や山鳴りがみられる。7月7日（8月4日）朝、道の灰を集めた山が角々にみられる。今までに経験のないことで驚いている様子が判る。午後、急に暗くなり、稲妻、地鳴りが響き、戸や障子がはずれるように動いている。家の中で俯している状態である。地鳴りが少しおさまってきたので頭を上げてみると、外が赤くみえる。火の雨が降ったようで生きた心地がしない。外が白々してきたので夜明けのようであるが、まだ5時過ぎである。大混乱している様子が判る。霰のような軽石が次第にはげしく降ってくる。夜通し激しく降り続く。7月8日（8月5日）降った軽石の重みで倒壊する家屋が現れ、人々は屋根に登り、灰をはらい落とす。屋根から降ろされた灰は軒下まで達した。灰を片づける所もないので道に敷きならした。道を歩く人の足下を見上げるようである。

また、日光例幣使街道の玉村宿（現在の佐波郡玉村町）問屋三郎治と庄左衛門の連名で道中奉行宛に浅間山の噴火で通行止めの訴えをしている。その訴えの中に7月5日（8月2日）の夜中5分程（1.5cm程）降灰があった。7月6日から8日（8月3日から5日）まで降灰が続き、2寸7分程（8cm程）積もった。1坪（3.3㎡）あたり1石5斗3升（275 $\frac{3}{4}$ 升）で1升（1.8 $\frac{3}{4}$ 升）の灰の重さは430目（約1.6kg）である。また畑に降った灰で5～6寸（15～18cm）の作物は灰で埋もれてしまったと記されている。（『瀧川村誌』より）

高崎市東町の『東町V遺跡』の報文で、「文月浅間記」よりAs-Aの降灰量を推定している。降灰量は、10cm前後と推定している。本遺跡は「文月浅間記」の高崎市街地とは約6km東に離れているが玉村宿とはそれほど離れてはいない。玉村宿の史料から推定すると15～18cmの作物が埋もれてしまうのであるから10cm前後が推定される。上滝五反畑遺跡では、3～4cmほどが確認できた。1次堆積に近い状態と思われるが完全ではない。上滝五反畑遺跡周辺の降灰量は3～4cm以上で、10cmより少ない量と考えるのが妥当であろう。

第2節 近世の水田について

上滝五反畑遺跡の第1面調査時に、①農具の跡はAs-A降下以前か、降下後なのか。②農具の跡のある畦畔で区画された遺構は水田か畑か。③なぜ農具の跡は残ったのか。④農具の跡の農具は何か。以上4点が疑